

# 堀合先生に学ぶ(10)

核になる自分を大事にしていくこと

上垣内 伸子

冬の間、十文字幼稚園は、登園時間が十五分遅くなる。すみれ組（三歳児）の子どもたちは、暖かいコートをたっぷり着込んでゆっくりとやってくる。先生に手伝ってもらってコートを脱ぎ、お弁当をカバンから出して保温器にいれてもらうという、普段より時間がかかる朝の支度のひとときも、子どもたちにとっては、先生や友だちと過ごす気持ちのいい時間のように見える。朝から、このような、ゆったりと落ちついた雰囲気を感じるのには、保育室の中

で、それぞれの子どもたちが、気の合ういつもの何人かの友だちと一緒に、めあての遊びに取り組んでいるからだろうか。しょうじはとしひとと積み木のところで基地作りに余念がない。新聞紙のボールを転がして野球をするりょう、はやと、しょうた。そして、あやか、あかりたちは、机を囲んでいつもの製作に取り組んでいる……。少しずつ、一人ひとりの子どもたちの自分の居場所というのが出来てきたようにも見える。

そんなすみれ組の中で、どうもみちるだけは落ちつかない。居場所が見いだせないでいるように見える。困ったような、なんともさえない顔である。みちるは、入園当初はりきっていて、「あたしが、あたしが」と目だっていた子どもである。規制の枠が強いのか、「〇〇しちゃいけないだよ」という類の発言が多く、いざこざが起きることもあった。みちるは、初めから、片付け等の先生の指示には的確に従っていた。四月の初めの帰りの集まりの時に、「先生、かみしばいはしないの?」と聞いたこともある。入園前に、既に、いくつかの場所で、集団生活を経験してきており、それらから、教師主導の生活のイメージを持って幼稚園に入園してきたようであった。

みちるの様な子どもは、どの幼稚園にも見受けられる。ことばでの主張もはっきりとしており、指示を受けての行動も的確なので、「しっかりした子ども」と評価を受けることもある。けれども、そのよ

うな子どもの中に、言われたことへの対応は見事なのに、自分で好きなことをして過ごすとなると、なかなか見つけられずに困る子どももいるように思える。主体的に遊ぶことの経験不足であろうか。比較的自由で、自発的に遊ぶことが大切にされる幼稚園にあっては、そのようなことがある。現在のみちるの浮かない表情は、彼女のいまだ幼稚園のイメージと、すみれ組の生活にズレがあり、なかなか自分なりの活動を見いだせずにいることからくるようにも思える。

#### 〈事例〉

みちるが、ホールで他の子どもたちが遊ぶ様子を見た後、保育室に戻ってくる。一緒にいることが多いりさが抱きついてきて、一緒にままごとコーナーのところへ行く。一緒にふざけようとするりさに応じず、机をベッドにして布団をかけて寝ようとするが、りさことしひとたちに場所

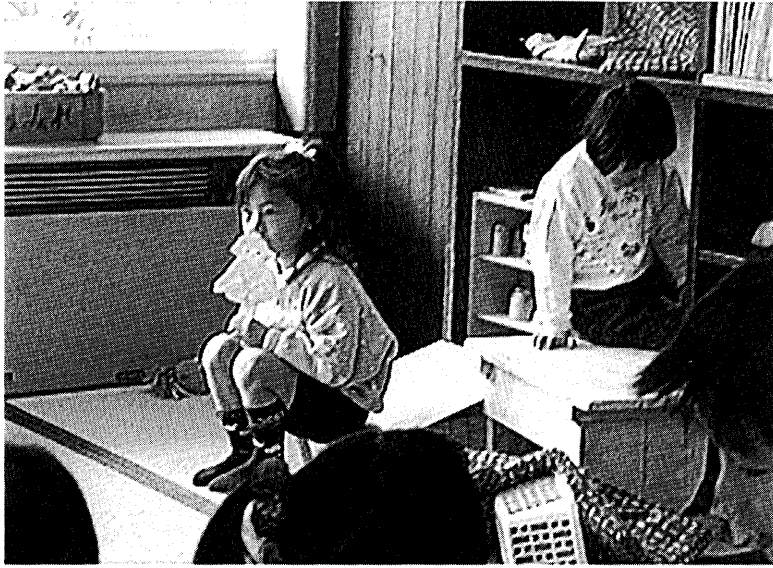
▼ 手きひざの間にはさんで……



の争いが起こってざわつくと、そこから離れて、他の子達が絵を描いている机に来てすわる。両手を机の下でひざの間にはさみ、前かがみになって、黙って他の子のすることを見ている。堀合先生は、その机のそばで、お面の紐を付けたら、子どもの求めに応じて絵を描いたりしておられる。

りさがやってきて、「ミンキーモモ！ ミンキーモモ！」と大声で叫んで先生に描いてくれるよう頼むと、みちるも「ミンキーモモ」と、りさに比べるとずいぶん遠慮がちに言う。そして、描いてもらうあいだ、ほおづえをついて待っている。やっとミンキーモモの絵を先生に描いてもらうと色を塗り始めるが、まわりを見て、すぐにはとりかかろうとしない。塗りかけて止めたりまた少し塗ったりと、一心に絵を描いたりしているまわりの子どもたちとは対照的である。りさが頼んだので自分も始めたが、どうもそれが本当に自分のしたいことではないような、そんな印象を受

◀ てきあがったけれど……



ける。

描き終えた子ども達はお面にしてもらったり、切りとってできあがったもので遊び始める。みちるも切りとるが、一人ぼつんと、ミンキーモモを持ってままごとコーナーにすわっている。園庭に出て行くが、しばらくして戻ってくると、保育室のまん中に一人ですわっている。その後、図書室で本を読んでいるりさこを見つけ、傍らでしばらく本をながめて過ごした。

この日は、あかりが、キリンの親子を描いて切り抜くと今度は遊ぶための公園を作っていたが、そのように、一つのところに腰を落ちつけ、じっくりと遊ぶ子ども達が多くみられた。それに対して、みちは腰が落ちつかない。絵を描いていても、終始目はきょろきょろとまわりに向けられている。かといって、何か面白そうなことがあれば何にでも頭をつっこんでやろうというのでもない。打ち込めない

のだ。それ故まわりのことが気になり、そしてそのためこれぞと集中して取り組むことが難しくなるという悪循環が生じている。みちるにとってはつらいことかもしれない。

子どもたちを観察していると、何かをする事に喜びを強く感じるような子どもと、どちらかというど、誰かと一緒にいることに楽しさを求める子どもとがいるように思えることがある。もとより、子どもを二つにタイプ分けできるわけではないし、どの子にも両方の要素があるであろう。また、この二つが並立して存在するものなのか、順序性を持って表れるものかも筆者にはまだよくわからない。観察から受ける印象でしかない。けれども、みちるを見ると、りさこと一緒に行動することで、居場所を見いだしたり楽しくなったりするように感じられる。このように、人への指向性が強い場合、その関係を気にするあまり、やりたい活動への取り組みが中途半端になったり、自分なりの活動の場が定まり

にくいということも生じるのではないだろうか。この日のみちるは、りさこと過ごすことを大事にするが、そこではどうも、自分のやりたいことが見つからないようである。

みちるは、堀合先生のことにも非常に意識している。目が先生を追っていることが多い。先生に伝えたいことも心の中にたくさん持っているのだろう。けれども、先生とつながりたいのに距離がなかなか縮まらない。堀合先生は、入園期の保育者のあり方について、「家庭の生活が少し広がったところにあるのが幼稚園で、家ではお母さんという頼れる人がいるけれど、幼稚園で過ごす間はお母さんがいない。そのかわりに先生という人がいて、この人に頼ればいいんだというように思ってもらえれば」と話されたことがある。けれども、みちるは幼稚園の先生をそのように認識していただろうか。幼稚園に対して既成のイメージを持っていただけのように、先生に対しても何か行動をコントロールするような枠を持つ

ているのだろうか。また、この時期、堀合先生も、みちるに対して、お母さんの代わりを越えた、保育者としての成長に対する願いや援助があるのではないだろうか。

堀合先生が保育の中で大切にされていることは何だろうか。保育後の話し合いの中で繰り返し出てくるのは、「自分で考えて、自分で決めて、自分でやる」「頭も心も体も、自分の持っているものすべてを使って遊ぶ」ということばである。前者は、自発性・主体性、後者は能動性・全人性とでもいったらよいのだろうか。

この能動性、主体性ということこそ、みちるに対する願いに他ならない。先生は、自分で自分のやりたいことを見いだして欲しいという思いを抱いてみちるに接しておられるのではないだろうか。だからこそ安易な助け船は出てこない。みちるは、指示に従うことは得意なのに、堀合先生は指示もしない。

この日の保育後、みちるのことが話題になったとき、「核になる自分を大事にしていくことへの働きかけが重要なのではないか」と話された。また、「『いま』を大事にするだけでなく、将来どんな人間になってほしいのか、大人になったときどんな人間になりたいのか、そのことを考えて接したい」とも言われる。遊んであげること、その場合は楽しく過ごせるけれど、それがその子の成長につながっていくのか……。これは堀合先生の保育哲学につながることもある。遊んであげることが簡単だけれども、もっと大事に子どもの核になるような部分を育てていくには、それとは少し違う援助のありようが考えられるということなのだろう。

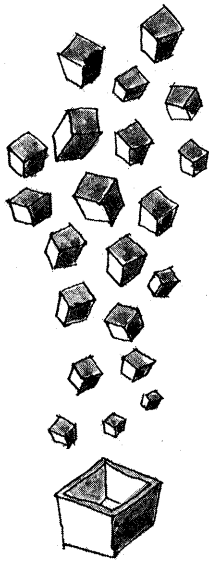
自由に遊ぶことを支えているのは、一人ひとりの主体性であり能動性であって、保育者には、活動を援助していくを通して、子どもの内面に働きかけ、活動を生み出す主体性・能動性を育てていくことが求められる。「自由とは厳しいものですね」と

筆者が問うと、「そうです。自由は厳しいですよ」という答が返ってきた。みちるは、これまでの育ちの中で、様々な規制を身につけてきたが故に、今、自由という海の上でアップアップしている。けれども、みちるは決して例外的な子どもではない。どの子どもも、多少の差はあれ、親や社会の要請を受けて育つ中で、同じ様な要素を持っていると考えられる。

二学期に、堀合先生は、これまでに培ってきた保

育者との信頼関係を基盤として、これからいよいよ保育が始まると話された。一人一人の子どもを理解し、それぞれに応じた援助を考えていくことであろう。保育場面における子どもを理解していく観点としてどのようなことがあげられるだろうか。

津守真先生は、「育つ」ということを、存在感・能動性・相互性・自我の四点に要約して考えるとしている。(\*) 存在感とは、ここで、いま、自分が生きていることの安心感と充実感。能動性は、子ど



もの内側から発動して、その時に備わった力を使用しようとする生命的な活動であり、それは、外部からの力や他人の期待にこたえるのではなく、人の内側から生じるもの。相互性は、規則や約束を通しての相互関係と異なり、人と人が相手に応じて調節し合う生命的行為と述べている。

保育における存在感とは何だろうか。その場が自分の生活の場であり、これが自分のしたいことなのだという決意が感じられるような存在の仕方だろうか。堀合先生が、日々の保育の中で大切にしておられることと相通じるものを感じる。

みちるの中にあるそうした自分なりの思いは見えないか。まだ生まれてきていないのか。この日の後半の観察で、みちるの中のこうして遊びたいというささやかな思いを感じることがあった。

#### 〈事例〉

みちるは、園庭でウルトラマンごっこをしてい

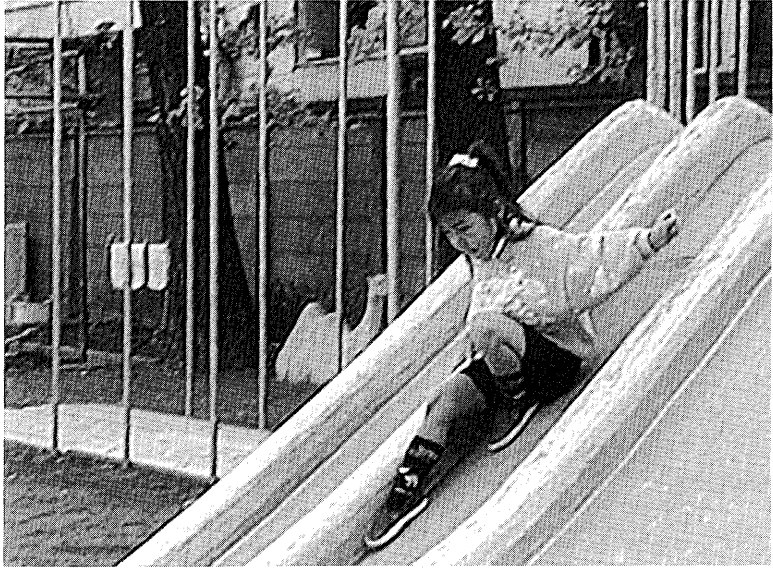
るさとしたちをみつめる。一緒に遊びたい気持ちで、園庭に出て行くが、なかなか表現することが出来ない。伝えることが出来ない。りさこにつきあってみたりするがどうも満足できないように見える。ホールで遊ぶさとしたちを園庭からガラス越しに見たり、近づいたりするが、彼らには気が付いてもらえない。

みちるは、保育室に戻ってくると、今度は、「ウルトラの母」のお面を作り始めた。さとしたちは、ウルトラマンタロウ等、思い思いのお面をかぶって遊んでいるからだろう。色を塗ると、先生にゴムを付けてもらい、「お外行ってきまーす」と元気よくかけて行った。今日初めて見る笑顔である。いきおいよく出てみたものの、さとしたちは見つかからない。けれども、みちるは、そのお面を手に、晴れやかな表情で一人遊んだ。

片付けの時保育室に戻ってきたみちるは、堀合先生に、「きのうね……」と盛んに話しかけなが



▶ お外、行ってきまーす



ら、ままごと道具の片付けを手伝っていた。

お面を作って出て行くのは一つの自発的活動であり、みちる自身の工夫である。初めて見せてくれた笑顔が、何よりそれを語っている。結果として仲間には入れなかったけれど、ある種の満足感があったように思える。おそらく、このような、小さな小さな活動の積み重ねが、子どもを育てていくのだから。時間のかかる小さな歩みだが、その変化を見守っていききたい。

(十文字学園女子短期大学)

(\*) 津守真「乳幼児精神発達診断法」『別冊発達8  
発達検査と発達援助』138～145P ミネルヴァ書房

一九八八年